

山形大学研修会「第14回FD合宿セミナー」

【第1チーム】FD合宿セミナープログラム及び記録

プログラム抜粋

FD合宿セミナーに当たって

学士課程教育の充実のためには、第一義的には各学部がその責任を負っていますが、学部の専門を超えた幅広い学びのあり方や授業の改善、学生の主体的な学習支援などは、学部の垣根を超えて全学的に取り組まなければならない課題です。また、生き残りをかけた大学改革に際し、授業の充実は最も重要な課題の一つでしょう。

今回のセミナーの第一の目的は、「個々の教員が、大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法・授業方法などについて、あたらめて主体的に検討し、再構築していただくこと」です。この目的を達成するために、まず、参加者の皆様に御担当いただく新しい授業科目について考えていただきます。そして、そのシラバスをグループで協力して作成していただきます。こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています。

セミナーは、大学への参画意識を高めるための2つのプログラムと、シラバスを作成するための2つのプログラムから構成されています。各プログラムは、グループ作業を中心に組まれており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

また、「大学間・学部間の人的交流の拡大・充実に努めること」が第二の目的です。他大学・他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が大学の教育分野全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーは東日本地域の「FDネットワーク“つばさ”」を始めとして、全国の大学に開かれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されることを願っております。



第1チーム参加者と山形大学教育開発連携支援センター須賀センター長（前列左から5人目）

第14回 山形大学FD合宿セミナー日程表

期 間 第1チーム：9月8日（月）～9日（火）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当
12:45	山形大学小白川キャンパス 集合・受付	
13:00	送迎バス 大学出発	
14:00	会場到着 記念撮影 セミナー開会 開会のあいさつ	司会：小田
14:30	オリエンテーション	小田
14:50	アイスブレーキング	小田
15:00～16:30	プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」	小田、 橋爪、時任
16:30～16:40	休憩（10分間）	
16:40～18:10	プログラムⅡ「理想の大学をつくる」	小田、 橋爪、時任
18:10～19:00	夕食	
19:00～20:00	入浴・休憩	
20:00～22:00	懇親会	橋爪、時任
22:00	中締め	
23:00	就寝	

○第2日目

時 刻	項 目	担 当
7:30～	朝食・部屋の清掃・部屋退出	
8:30～10:00	プログラムⅢ 「科目設計1：授業名と目標、内容の作成」	小田、 橋爪、時任
10:00～10:10	休憩（10分間）	
10:10～11:40	プログラムⅣ「科目設計2：シラバスの完成」	小田、 橋爪、時任
11:40～	修了式	小田
12:20～	昼食	
14:30	送迎バス 蔵王山寮出発	
16:00頃	山形駅経由 大学到着 解散	

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。
- 退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。
- スキーヤーズベッドは各部屋2段になっておりますが、清掃と危険防止の観点から2階部分は使用しないでください。
- ベッド上での飲食はご遠慮ください。

オリエンテーション

1 F Dの必要性

- ① 大学の組織的教育力の向上
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学教員個々の教育力の向上
- ④ 大学生の質的変化への対応
- ⑤ 大学の社会的な教育責務の明確化

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えることの位置付け
- ② 教育の基本的構成要素、大学における各科目の存在意義、授業設計、成績評価法などをあらためて整理する。
- ③ 教員相互の交流

3 セミナー形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：6班
班の構成員の年齢は幅広くする。
- ③ 各プログラムに、毎回、総合司会者と記録係を置く。（各班の持ち回り）
- ④ 各班に、毎回、司会者と記録係、発表者を置く。（持ち回り）
- ⑤ 全体と各班の記録係は、各プログラム終了後に記録を提出（この記録は、コピーした後、速やかに全班に配付）
- ⑥ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表と質疑応答に対し、5段階で評価を与える。（この評価は、毎回回収し、整理した後、速やかに掲示する。）
- ⑦ 合宿セミナーに関するポストアンケートを実施

4 各プログラムの基本的形態

○各プログラムの講師による作業内容の説明	10分
○グループ作業	40分
○発表 各グループ	24分
（各グループの発表時間4分×6班）	
○全体討論	16分
全体で	90分



開会のあいさつ 須賀センター長



オリエンテーションの様子

プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」

○各班同じテーマ プログラムⅡも念頭に置く。
現実的、具体的に解析する。

- 1 大学には何が求められているか？
 - ・社会は大学に何を求めているか？
 - ・学生のニーズ
- 2 大学の置かれている状況分析
 - ・そこには、どのような課題（問題）があるか？
 - ・長所（望まれていること）
 - ・短所（望まれていないこと）
 - ・その生じさせている理由・原因は何か？
- 3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など



発表の様子①

プログラムⅡ「理想の大学をつくる」

プログラムⅠの問題点などを踏まえた上で、理想の大学をつくるためには、これからどのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。大学の理念・目標を実現するための具体的な行動目標、大学の「個性」と「売り」をどのようにするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められている。

- 1 大学の理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- 2 方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- 3 実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書など）
 - ・その宣伝・普及の方法（4年計画案）
 - ・組織論（学部、学生の入口と出口（入試制度と就職）、委員会制度など）
- 4 評価（測定方法、学生、教員、ステークホルダー）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する（誰がどのようにして）

プログラムⅢ「科目設計1：授業名と目標、内容の作成」

ここでの課題

シラバス作成作業の第1段階として、各グループごとの課題に対応した授業名と学習目標の設定を行う。

プログラムⅢ,Ⅳの各グループの課題

- A班：大学の個性を発揮する授業
- B班：主体的に考える力を育成する授業
- C班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- D班：国際性を培う授業
- E班：21世紀の諸課題に対応する授業
- F班：職業意識と労働意欲を培う授業

学習方法と道筋(戦略,学習方略)を明示する。具体的には,学習者が到達目標に達するために必要な学習方法の,種類と順序を示す。

作業1 授業名の決定：○○○○○○○○○○(仮称)←内容確定後,最後に決定?

作業2 学習目標の設定

1 踏まえておくべきことから：

- (1) 教員中心ではなく,学生による学習を中心に考える(教員の果たすべき役割の再検討)
- (2) 大学に対する社会的ニーズ
- (3) 大学の全体的な教育目標

註：(1)について

大学の役割

- 講義の提供 → 学習方法と教育方法のデザイナー
- 学生から独立 → 教員と学生を一つのチームと考える
- 学力差を明確にする → すべての学生の能力と才能を引き出す

成功へ向けて

- 伝授する資源の重視 → 学習と学生の成功の産物を重視
- 資源の量と質の重視 → 産物の量と質を重視
- 入学生の質の重視 → 卒業生の質を重視
- カリキュラムの発展と拡大 → 学習技法の発展と拡大
- 大学の質・内容の質 → 学生の学習の質

使命

- 知識の提供・伝授 → 学習を生み出し,知識の発見と形成へ
- コース・プログラムの提供 → 強力な学習環境の提供
- 教育の質の改善 → 学習の質の改善
- 多様な学生への対応 → 多様な学生を卒業させる

教育

- 教員中心・知識伝授 → 学生中心・知識発見
- 教育の質 → 学習の質,学習効果・効率
- 指導者としての教員 → 学生の才能・能力を引き出す助言者
- 個人的・受動的学習 → 共同的・行動的・能動的学習

2 学習目標の記述

各科目の学習目標を表現することの必要性とその表現方法を学ぶ。学習の効果は,教育の受け手(学習の主体)である学生の変容で評価されるべきである。そのために,①授業の目標と②到達目標を定める。

註：授業の目標を作成する際の注意点

原則

- (1) 学習者を主語として書く

(2) 学習の結果、いかなることができるようになるかを明示する

記述内容

- (1) 知識・技能の学習がなぜ重要か。それによって学生の要求がどのように満たされるかを明示する。
- (2) 複雑・総括的な概念を持つ動詞を用いる。
知る，認識する，理解する，感ずる，判断する，評価する，考察する，位置付ける，実施する，適用する，示す，創造する，身に付ける，等々
※単純な行動を示す動詞は用いない（述べる，列挙する，選ぶ，記載する等々）
- (3) 必要な目標分類（認知・態度・技能）を総括的に含める。

註：到達目標を作成する際の注意点

授業の目標を達成するためにどのようなことができるとよいか，具体的に明示する。

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 動詞を含むこと
- (3) 「理解する」のような概念的言葉ではなく，観察可能な行動を具体的に表す
- (4) 授業の目標と関連していること
- (5) 到達レベルを書く
- (6) 認知，態度，技能を分けて書く
 - 知識**（認知領域）：知識を得て理解し，一定の能力を獲得する
述べる，説明する，分類する，比較する，解釈する，推論する，一般化する，適用する，結論する，批判する，評価する，等々の動詞
 - 技能**（精神運動領域）：知識・能力を活かして意識的・具体的に行動する
感ずる，始める，模倣する，工夫する，行う，創造する，触れる，調べる，準備する，測定する，等々の動詞
 - 態度・習慣**（情意領域）：獲得した知識・能力を，情報として相互に提供交換し合う
行う，コミュニケーションする，協調する，示す，表現する，系統立てる，参加する，応える，等々の動詞

作業3

原則として，週に1回90分の授業を15回実施するものとして，授業の内容を考えてみる。その際，授業の順序と各回の内容，学習法，利用する媒体，資源などについて明示する。授業外学習（主体的学習、予習・復習、宿題）についても適切に配慮し，授業全体をデザインする。内容によっては，授業の目標，到達目標，さらには科目名についても変更が必要になるかもしれない。

註：学習方法の種類

- (1) 受動的学習法：講義など
- (2) 能動的学習法：①グループ討議（演習，セミナー，ディベートなど）
②実験・実習
③自習（読書，個人研究，コンピュータ活用学習など）

註：学習のための資源

- (1) 人的な面で：
- (2) 物的な面で：①場所
②媒体（スライド，OHP，標本，VTRなど）
- (3) 予算

プログラムⅣ「科目設計2：シラバスの完成」

ここでの課題

プログラムⅢで作成した授業について、シラバスを完成する。

○成績評価

その位置付け

- (1) 教育評価は、学生、教員、カリキュラム（目標、学習方法の立案（方略）、評価）の三者が対象
- (2) 成績評価は、その中の一つ。

留意点

- (1) どの行動領域を評価するか

- ① 知識（認知領域）
- ② 技能（精神運動領域）
- ③ 態度・習慣（情意領域）

- (2) いつ評価するか

- ① 学習前（プレテスト）
- ② 学習中（中間テスト）
- ③ 学習終了後（ポストテスト）
- ④ フォローアップ・テスト

- (3) 評価の目的

- ① 形成的評価：学生が理解している点、理解が不足している点を発見し、学習法、教授法へのフィードバックが目的。最終評価の参考にしない。
- ② 総合評価：到達目標に対する学生の到達度を計測する。

- (4) いかに評価するか、複数の評価項目のウェイト

- ① 論述試験
- ② 口頭試験
- ③ 客観試験
- ④ 実地試験
- ⑤ 観察試験
- ⑥ 論文（レポート）

評価の持つべき性格

- (1) 妥当性：計測しようとする項目を計測できる方法か？
- (2) 信頼性：計測結果の再現性は良いか？
- (3) 客観性：計測者（教員）が替わっても、同じ結果が得られるか？
- (4) 効率性：経済的にも時間的にも実用的か？
- (5) 特異性：なぜ、そういう解答がなされたか分かるか？



発表の様子②

プログラム I 記録 「大学へのニーズと課題」

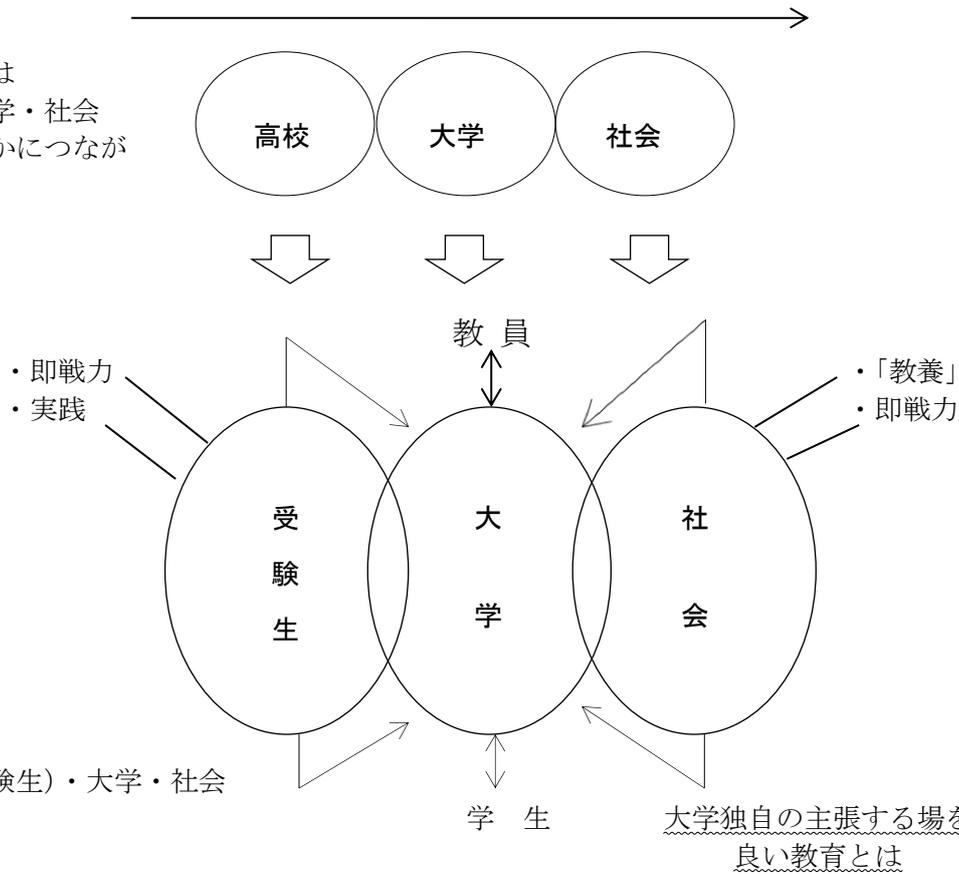
<h2>蔵王 Fresh (A班)</h2>	司会者：井口 記録者：嶋崎 発表者：小手川
<p>1. 大学には何が求められているか</p> <p>(1) 社会は大学に何を求めているか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 専門性、即戦力、資格（何ができるのか）＝採用しやすい項目 → <u>それだけでははかれないものが必要だが、社会のニーズに反する教育は大学はできない</u> ∥ 考える力、チャレンジする力、等・・・ <p>(2) 学生のニーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 役立つ資格の取得 ・ 学習意欲・知的好奇心 <p>資格を使って何ができるか 自分の学びたいものは何か（＝潜在的なニーズ）</p> <p>2. 大学の置かれている状況分析</p> <p>資格等の分かりやすい評価だけではなく、知的好奇心を高める必要がある。 学ぶ意欲に対する手厚い指導プログラムが望まれている。 生じさせている理由・原因は何か？</p> <p>→ <u>教員の思いと学生の思いのギャップ</u> （短所：資格取得に偏りがある。 将来のビジョンの見えない学生）</p> <p style="text-align: center;">教員が放置せずに共に学びディスカッションする</p> <p>3. 改革の必要性</p> <p>個人だけでなく大学全体で問題解決にむかう。 学生の力も借りる。学生チューターをつくり、雰囲気づくりやニーズを分かりやすくする。 一緒に考えていくシステムづくり。</p>	

<h2>山形フレッシュ (B班)</h2>	司会者：橋爪 記録者：木下 発表者：鈴木
<p>◎大学の状況の例：</p> <p>岐阜医療大学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国試がある→合格が大切 ・ 国試がある大学はどこも同じ問題 ・ 社会とのネットワーク→地域にどのような人材を出すか重要 ・ コミュニケーション能力大切 <p>桜の聖母短期大学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員養成の特徴・社会の希望：離職しないでほしい 学生ニーズ：やさしく資格を取りたい→できない <p>国際武道大学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 入学者の学力の↓ 大学の特色を活かすことができていない現状 ・ 社会のニーズとずれてきている <p>社会のニーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 就職率↑ 離職しないでほしい ・ この大学で何をしてくれるのか伝えることが大切 ・ 地域に役立ってほしい <p style="text-align: center;">大学の目的の明確化 = 重要</p>	

あわもり (C班)

司会者：安田
 記録者：郷内
 発表者：梶ヶ谷

☆これまでは
 高校・大学・社会
 がなめらかにつなが
 っていた。

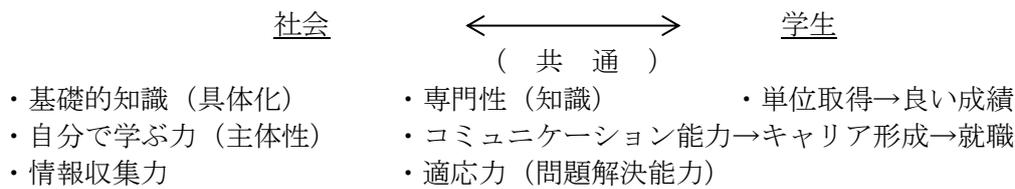


☆高校 (受験生)・大学・社会
 のかい離

セプテンバー (D班)

司会者：高橋
 記録者：幸田
 発表者：金

1. 大学には何が求められているか？



∴ 実は共通部分が多い!

2. 大学の置かれている状況分析

3. 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

- 問題点
- 基礎学力の低下 → 目標の不明確 (覚悟がない)
 - ニーズのずれ (社会⇔学生)
 - 単位制度 (履修システム)

理由・原因 ・大学進学率の増加による大衆化

必要性 ・社会と学生のニーズをくみとる

さくら（E班）

司会者：千葉
記録者：小見山
発表者：千葉

山大3名 ・ 他大学3名

- ㊦女子大→共学へのニーズ高まる。女子校の強みが必要。
女子は短期的目標をこまめに与えた方がよいとも言われている。
- ㊧生産・流通のグローバル化→企業の流れと大学の方向マッチしていない。
ガバナンスという考え方大学に合っていない。教育の質向上の基準がはっきりしない。学生の求めることに合わせるだけじゃない。
- ㊨大学が質的に変わったわけではないが、学生が勉強しない、大学がさせない悪循環。
- ㊩学生の変化、マナーも。実習の時に大丈夫か？となる。大学はマナー教育も必要。
- ㊪大学の中に学生に対して competition 競争がない。勉強させる強制力がない。
- ㊫マナー教育も必要になってきている。教員は自分の分野を教える。もっと幅広い基礎+実践的なこと必要では？
社会で生きていく力。
でもよけいに「お世話」が必要な学生になっていく。

現状

求められているものに対応できてない

組織レベルの教育ビジョンがいまいち個のカリキュラムに反映できていない。学生の質的（メンタル）変化。ただ厳しくすればよいわけではなく、「勉強しなくても単位」となる

求められているもの

実質的なこと、専門知識がどう役立つか。
基本的な人間のマナーをつけさせることも。

さわやか（F班）

司会者：松井
記録者：川辺
発表者：川辺

- 各人でそれぞれの大学の問題を出し、議論した。
- 入ってくる学生
 - ・資格が取れる、就職できる
 - ・外に出たくない（内向き）
 - ・偏差値により学部、大学を決めてしまう → 目的外入学
 - ・専門を極める気はない → 教員との目的が違う

社会 多角的思考力・忍耐力を求めている



道筋をたててあげる
教員も学生に目的意識をもたせる努力を



◇グループ作業記録 プログラム I 全体討議記録

A 班

- ・ ニーズ：資格・即戦力。ただし、企業も単純に資格を求めているわけではない。
- ・ 短所：教員と学生のギャップ。自分が何になりたいかわからない。それに大学が関れない。接点がない
- ・ 改善：大学は材料を与えて考えてもらう。学生と教員の距離を縮める。学生を使ってまとめる。

B 班

- ・ 教職をとる大学の教員が中心で話をした
- ・ ニーズ：大学の目的の明確化。学生のニーズは資格。大学に行ったからこそ身につけられる資格。
- ・ 問題：たとえば教員にならない人へのフォローアップ。キャリアデザイン。
- ・ 改革：進路の多様性を知ってもらう（大学の専門と違った道に進んだ場合）。

C 班

- ・ ニーズ：高校、大学、社会の関係がバラバラだったが、クロスオーバーするようになっている。
- ・ 問題点：教養ではないか。しかし大学は教養を解体してしまっている。学生の期待外れになっている。そのため気持ちが大学から離れていく。学生・社会のニーズに答えられていない。
- ・ 伝える努力が一つ。学生の変化を認識することがもう一つ。文科省を恐れない。

D 班

- ・ ニーズ：社会としては。専門知識。教養。仕事力（収集力、実行力）。市民力（適応力、問題解決力）。学生としては。社会のニーズと共通。ただし簡単に。
- ・ 理由：大衆化。

E 班

- ・ ニーズ：実践的なもの。資格が実際にどのように使われるか。
- ・ 問題点：大学が十分に対応できていない。組織だったものができていない、または避けられている。女子大においては、女子大ならではのもの。
- ・ メンタルが弱くなっているのではないか。大学としては学生を卒業させなければならない。現状は勉強しなくてもできてしまう。

F 班

- ・ メンバーは専門職養成学校の教員。
- ・ ニーズ：資格が取れて就職できるか。地元志向。目的外入学。不本意入学。専門を極めたい学生は少ない。ところが社会としては専門性を求めている。忍耐力・思考力なども。
- ・ 改善：学生に目的意識を持たせる。道筋を立ててやる必要（履修モデル）。

質疑応答

C 班の「文科省・受験生を恐れない」の具体策：

- ・ 文科省の呪縛が強い。強制的。
- ・ 制度上それは仕方ないので、それを上手に活かす。
- ・ 受験生については、自分たちがどんな人間を育てるべきか、主張する。人間性を育てる教養。

D 班の「社会のニーズ」は我々が本当に捉えられているのか？また 10-20 年後もそう言えるのか？本質か？

- ・ 具体的なニーズは刻々と変わる。
- ・ 問題解決能力は不変。専門は学んでほしいが、問題にぶち当たった時に対応できる能力。

D 班の「専門知識」は求められていない、または到達していないのでは？要求されていないのではないのか？

- ・ 「専門」に関する「基礎力」が求められている。
- ・ 学部の 4 年では不足で、6 年かけてようやくエンジニアとして就職できる。
- ・ 分野・学部によるのではないか。



プログラムⅡ記録「理想の大学をつくる」

蔵王 Fresh (A班)

司会者：藤山

記録者：表

発表者：井口

I にこだわらず、他のグループから出された意見も

(司) 総合大学を作る

- ・ 個性的、伝統的な大学 歴史のある大学は限られている
- ・ 地域を大学がどの様に連携するか
- ・ 地域の企業とつながりをもつ 地元重視
- ・ 地域、地元貢献できること
- ・ 新潟・米の研究
- ・ 近大・養殖マクロなど
- ・ アートで町を活性化
- ・ 地元から出たがらない→地域密着、人材の地産地消
- ・ 地域活性化→国際的にも広げていく
- ・ 国立と私立で変わる→蔵王 Fresh 大学をつくる
- ・ 山形大 海外へ日本語チューターに行っている
- ・ アジアの成長をとり込む 総合大学 理系重視

「アジアと地元が入り乱れる」 「蔵王からアジアへ、アジアから蔵王へ」

「蔵王から世界へ」

アジアから、世界からどちらか 時差のないマルチカルチュラル、先進国からとり込むの呼び込むのは大変 現実的にアジア

II 方略

(活動) 理系→アジアからの留学生 アジアからの留学生約 1/2 教員も 1/2
留学アジアへ、1年半(半年は語学、現地語)

連携校を沢山作る

(財源) 地元から資金を集める。地元からアジアから優秀な人材を育てて供給する。
就職を約束して、奨学金を企業から受ける。

(入試制度) 日本語又は英語、学力、コミュニケーション力

(教育) 専門力を高めながら、異文化コミュニケーションでコミュニケーション力を育成する
卒論は必要か

☆ 留学を活かす グループ研究 アクションにつながる企画をさせる
卒業論文 地域活性化 4年間の学生のポートフォリオを作成

☆ 地域の企業にてインターン (→異世代交流)

評価 地域活性化→具体的な指標 人口増加

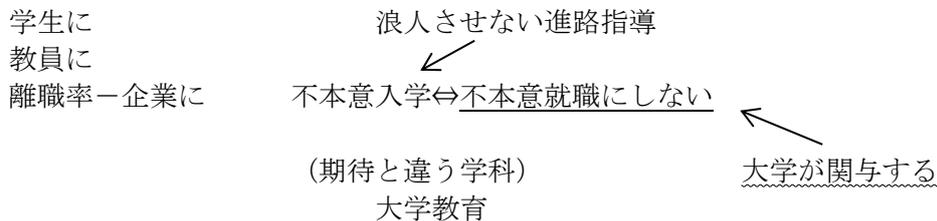


山形フレッシュ（B班）

司会者：下郷
記録者：川城
発表者：橋爪

「理想の大学をつくる」

1. 理念・目標…社会で働きつづける学生を育てる。
 - ・愛と奉仕…幼児教育（桜の聖母） 国立は、教育の機会均等
 - ・人となれ、奉仕せよ…キリスト教（関学）
 - ・すばらしい技術者たる前にすばらしい人間たれ（岐阜医療）
 - ・武道を通じて、人間性を。武道を通して国際性を。（武大）
2. 方略
 - ・インターンシップ…現場を経験…
 - 挫折の経験も大切
 - 挫折する学生も出る
 - ・専門と違う社会を見てくる（見る機会をつくる）…視野を広げる
 - ・入試の時に、大学の授業の内容・様子を体験させる…判断の材料にさせる
 - ・挫折した学生にも、その後のケア（別の道を見つける）を。
3. 実行計画
 - ・2年次にインターンシップ、3年次他の世界も見てくる
 - ・もっと長く「インターン」シップを…現実を見る
 - ・インターンシップで適正を見きわめよ…適正に気付かせよ
4. 評価



あわもり（C班）

司会者：
記録者：郷内
発表者：安田

自己分析、自己研さんのための能力ー長期的に役に立つ力

自立、責任、共生

- 1年生のころからグループディスカッションをさせる。
- カウンセラーを入れる。アドバイザーを入れる。
- ピアレビュー…他人を評価することで自分も振り返る。
- 4年間で習慣化させる。

学習記録をためて、振り返る。

長所を自己評価できるようにする。ー長所を分析することで短所も知る。

教員間の温度差をなくす、共通認識を持ってもらう。

セプテンバー（D班）

司会者：小野瀬
記録者：落合
発表者：柗

1. 理念・目標

入れる大学、出られない大学 学生に主体性を身につけさせる。
基礎学力の充実
地域を軸にして、国際性豊かな人材の育成

2. 方略

面接のみの入試、覚悟を問う面接、定員なし。

3. 実行計画

1年生（基礎）には単位認定なし。 上級生が1年生を教育
2年次に進級学力試験 社会参加への教育
2年次より専門に入る

4. 評価

就職先から後は評価してもらう。

さくら（E班）

司会者：神田
記録者：星野
発表者：神田

① 理念 「キャッチフレーズ」 インターンシップを有機的にカリキュラムに取り込む。

- ・地域に根差した医療
- ・現場で活躍できる人材を育てる

② 方略 下記の課題に対してどこまですべきかを明確にした上で、カリキュラムを作製

- ・現場で活躍できる。
- ・メンタルの強さ。
- ・コミュニケーション能力
- ・社会生活力
- ・基礎学力

③ 実行計画

- ・基礎学力とコミュニケーション力向上を同時進行
- ・リメディアル教育
- ・インターンシップ
- ・災害時ボランティア
- ・グループディスカッションを用いる教育（合宿含む）
- ・臨床心理士などを採用（スクールカウンセラー含む）

④ 評価

ステークホルダー（実習先、就職先、派遣先）
国家試験

（本報告の前提は、指導を必要とする学生が多い＋専門性を求める大学）

さわやか（F班）

司会者：開
記録者：堀内
発表者：堀内

○さわやか理工大学（大学院併設）

○理念・目標

理念：多様性を尊重します。

キャッチ：多様な世界で君は鍛えられる。

○方略

- 縦割授業をメインに
 - ・ひとつの目的で1-4年一緒に。
 - ・実習（実験、ゼミ）主体。
- ピラミッド構造がある方が良い。

○実行計画

- ・オープンキャンパス重視
- ・本当の体験（ゼミの中に受験生を参加）
- ・新入時に協同作業でコミュニケーション力を培う。（スタートUPセミナー合宿セミナーで横のつながりを作る）

○評価

- ・卒業生の追跡



◇グループ作業記録 プログラムⅡ 全体討議記録

F 班

- ・「さわやか理工大学」（大学院併設）
- ・多様性を尊重する大学。
- ・縦割り講義を中心に行う。学年に応じた適切なカリキュラムを設け、到達目標を定める。
- ・ピラミッド構造（修士は必須、博士も）
- ・オープンキャンパスは随時受付する

E 班

- ・地域に根差した医療を支える大学（単科大学）
- ・現場で活躍できるスキルを確実に身につけて社会に送り出す
- ・現場で使えるスキルを明確化した方略を展開する
- ・リメディアル教育の同時進行
- ・カウンセリングの充実
- ・インターンシップを単位化することで実践力を身につける
- ・評価として、国家試験の合格をしっかりと考える（土俵に上げさせる）

D 班

- ・社会と学生が大学に求めるもののズレから分析「専門知識」「教養」「仕事力」「市民力」
これらを踏まえたうえでの大学の理念→「入るは易く・出るは難しい」大学。
- ・入試：面接で覚悟のみを問う
- ・社会参加を重視したカリキュラムを実施する
- ・評価：就職・進学率と所属先の後日評価

C 班

- ・理念：社会に出て長期的に役に立つ能力をもち、自立した学生を育成する。成長し続けるための能力を身につける。
- ・長期的に考える習慣を学生に身につけてもらう。授業において、ピュアレビューを導入する。
- ・評価：学生による自己評価・自己分析など

B 班

- ・理念：社会で働き続ける学生人間育成をもとに考える。
- ・社会に触れる機会を多く取り入れる。社会に出ることで挫折する機会も多くなるが挫折も成長の機会ととらえ、そこをカバーするシステムを構築する。
- ・視野を広めるための機会を多く取り入れる（他部門、多領域でのインターンシップ等）
- ・不本意入学、不本意就職を無くすための支援の徹底
- ・様々なキャリア支援の体制を整える
- ・評価：次回のプログラムにて検討していきたい

A 班

- ・「私立蔵王フレッシュ総合大学」
- ・理念：蔵王から世界へ！世界から蔵王へ！
- ・半分はアジアからの留学生
- ・日本人に関して、半年は海外でのインターンシップを実施。教員も半数は海外から。
- ・入試：グループディスカッションによる入学試験
- ・コミュニケーション能力を高めるためのカリキュラムが充実した大学
- ・評価：卒論にこだわらない。インターン、実社会との接点を多くもつ

質疑応答

E 班の「評価を国や企業に委ねることについて」大学の存在意義は？

- ・国家試験合格が到達点ではなく、あくまでも目安。
- ・大学の教員の自己満足ではなく、他の視点も含めるという意味。

B 班の「インターンシップ」の意味とは？(宗教性を出すということ？)

- ・広く社会に出るという意味。学生が社会と触れ合うという意味でインターンシップという言葉を用いた。

D 班「主体性のない学生」を脱落させることは現実として可能なのか？

- ・議論はそこまで及ばなかった。しかし、理念として重視して考えた。

(B 班から回答)

- ・挫折をした学生に対しての対処は班の中でも議論に上がった点。挫折も成長の機会と捉えたい。

(F 班から回答)

- ・ピラミット構造を上手く使えないか。様々な視点（縦割り）で、対処したいと考える。



プログラムⅢ記録 「科目設計1:授業名と目標,内容の作成」

<h2>蔵王 Fresh (A班)</h2>	司会者：飯島 記録者：小手川 発表者：時任
<p>目標 1) 異文化交流 2) 地域活性化</p> <p>授業名：地域と異文化交流—蔵王の魅力とアジアをつなぐ 学習目標：地域活性化のプランを具体的にたてることのできる 2) 調査 3) プラン 4) 実行 することのできる 1) 課題を設定することのできる</p> <p>※ [海外との接触を入れる (売り込み) — 宗教・異文化 地域売り</p> <ol style="list-style-type: none">1) 課題を設定することのできる：地域の人意見・学内でのプレゼン・学生同士の評価2) 調査：社会調査法を学ぶ (他の講義の成果を生かす) — 主体的な取り組み グループ内での議論 ・ グループ同士での議論3) 実施調査：フィールドワーク、実際に調査 調査結果を得る4) プランニング：調査結果に基づいてプランをつくる5) プレゼン：地域・外国人がゲストスピーカー → 優秀なプランを後期実現	

<h2>山形フレッシュ (B班)</h2>	司会者：木下 記録者：下郷 発表者：柴田
<p>「主体的に考える力を育成する授業」 (仮) 主体的職業意識=理念：働きつづける学生を育てるを意識して</p> <p>☆学習目標の設定 (何を出来るようにしたいか) 位置づけ 実習科目とする ← 来年実習に行くための前講義 (15回のうち何度か実習)</p> <p>主目標 ← [社会で働いている人に実際に講義をしてもらって学生に意識づけをする。 学生に興味を持たせるように、事前に何を聞きたいか聞く。 → 学生に主体性が生まれる。 → 事前に<u>学生に主体的に取り組ませる</u>ようにする→基礎学力が必要。</p> <p>作業 ← [学生をグループ分けして、興味のあることについて調べさせる。(調べ学習) →自分たちで調べたいこと、<u>ゲストスピーカーとの相違</u>を勉強してもらう。 (イメージと実際のギャップ) →挫折を経験するか？ 異学科の合同の授業にしたら良いか。(看護、医師、技師)</p> <p>☆到達目標</p> <ul style="list-style-type: none">○ 調べたことを発表できる。○ 事前に調べたことをゲストスピーカーに質問できる。○ 自分たちの調べたことと、ゲストの講義の相違を理解できる。 <p>本講義は演習形式とする。</p>	

あわもり（C班）

司会者：佐藤
記録者：新野
発表者：山内

授業名：地域掘りおこし（仮）
－伝統文化の再構築－

学習目標

地域文化を知り 自大学の存在価値を理解する

言葉や方言を継承する。その残し方と地域のニーズを考慮する。

到達目標

地域のことばの意味を説明する

ニーズの掘り起し

授業内容

基本講義

地域文化をフィールドワークを通じて収集・分析する。

調査分析

討論

セプテンバー（D班）

司会者：幸田
記録者：金
発表者：小野瀬

国際性を培う授業（教養科目）

・国際性とは？

このプロセスを→
経て身につくもの

- ①自分の国のことを知る
- ②日本の中の異なる文化・歴史を知る
- ③異なる文化に抵抗がない
- ④相手（違う）国のことを知る・わかる
- ⑤自国と他国を比較できる
- ⑥異なる文化を理解する
- ⑦異なる文化とコミュニケーションできる
- ⑧異なる文化の人・組織と共働・貢献できる

キーワード

「比較」・・・自国のことを知ってるから他国と比較できる

自国 × 他国
自己 × 他己
(自分) (他者)

授業名：「世界と私」 グローバル文化入門

到達目標：自国（自分）と他国（他者）を比較し、理解できる

さくら（E班）

司会者：有馬
記録者：日高
発表者：有馬

科目設計

- ① ナノテク紹介
- ② 水素社会紹介
- ③ 学生一人一人がテーマ選択して最終日にプレゼン
質疑応答を通じて評価を行う
- ④ 宿題にする
- ⑤ オフィスアワー

学習目標：新エネのナノテク開発法を教える
到達目標：ナノテクの基礎について理解する

さわやか（F班）

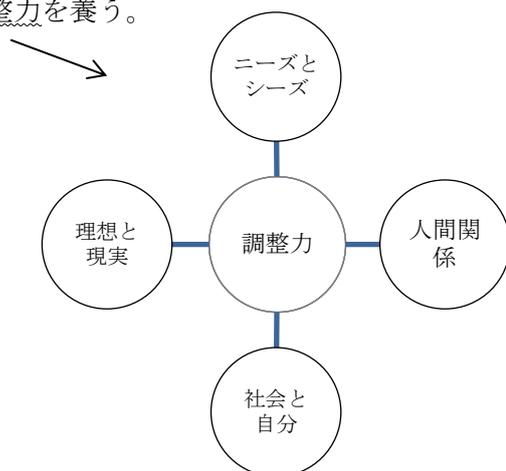
司会者：進藤
記録者：進藤
発表者：永山

授業名 「社会の中での、中への、研究活動」（3年前期）

F班では、9/8に設定・検討した、さわやか理工大学（大学院あり）の縦割りゼミ形式での授業の前提で検討する。

ねらい

自らのシーズを理解し、社会のニーズを調査し、最先端研究の知識を還元することを通して調整力を養う。



目 標

- 研究活動の成果を形として社会に受け入れてもらえることにチャレンジする。
- 到達目標
 - ・ 社会のニーズを調査し課題を発見することができる。
 - ・ 自らの知識・技能を活かし、最先端研究の内容を翻訳することができる。
 - ・ 社会の中での自分の立ち位置、役割を説明することができる。

◇グループ作業記録 プログラムⅢ 全体討議記録◇

A 班

- ・日常的に異文化交流ができる大学環境、地域連携に長けている——という大学の個性を発揮する授業。
- ・「地域・異文化交流—蔵王の魅力とアジアをつなぐ—」
- ・課題を設定（地域住民や外国人教員のゲストスピーカー、グループワーク）、調査の計画と実行、地域活性化のプラン生成、プランの評価（地域住民による評価）

B 班

- ・「主体的職業意識」
- ・前半はグループでの調べ学習。後半は専門家（ゲストスピーカー）を招聘するなど。
- ・主体的に職業に関心を持ち、学習しようとする意識を持つ。

C 班

- ・「地域掘りおこし—伝統文化の再構築—」
- ・地域のことばの意味を説明する。
- ・科学的、思想的な分析、考察を行う。
- ・地域の方に来てもらったり、フィールドワークをしたりする。
- ・授業構成は、基本講義、調査分析、討議。

D 班

- ・「世界と私—グローバル文化入門—」
- ・「教養」 - 「市民力」育てる
- ・国際性とは何かを教える。
- ・日本文化（自分）と異なる文化を比較し、理解する。

E 班

- ・「ナノテクとエネルギー」（大学院生を対象、20人）
- ・エネルギー問題の解決法としてのナノテク開発について基礎知識を習得する。
- ・自分が専門にしたテーマを学生個人が選んで学習を進め、プレゼンを組み立てる。

F 班

- ・社会の中での、中への、研究活動
- ・自らのシーズを理解し、社会のニーズを調査し、最先端研究な知見を還元することを通して、調整力を養う。
- ・研究活動の成果を形として社会に受け入れてもらえることにチャレンジする。

質疑応答

A班への質問

・地域に関することを学ぶのが、どう国際性につながるのか？

→蔵王のものを海外、海外のものを蔵王へ、相互に交流する。

B班への質問

・専門家を参考にした学生の意見と現場の意見のギャップは必ず生まれる？

→多かれ少なかれ「そんなことない」という意見は出る。

E班への質問

・最終的に学生に求めるレベルはどの程度か？

→文献を選ばせて、材料の合成方法など、具体的に実現可能性があるか評価

→聞いている学生がどこまで質問できるかも評価

D班への質問

・「市民力」と「教養」の関係は？

→仕事に収れんしない、市民生活に関する能力としての「教養」。

F班への質問

・人文系の場合は、社会のニーズにこたえることができるか？

→心理や哲学といった人間に関する知識が、「調整力」に生かされる。



プログラムⅣ記録 「科目設計2:シラバスの完成」

授業科目 地域・異文化交流～蔵王の魅力とアジアを繋ぐ～ (蔵王 Fresh/A班)

担当教員: (小手川正二郎, 嶋崎綾乃, 井口晃徳, 表真美, 藤山直之, 飯島隆広)

担当教員の所属: 蔵王 Freshh 大学 FD チーム

開講学年: 1年~4年 開講学期: 前期 単位数: 4単位 開講形態: 演習

開講対象: 科目区分:

【授業概要】

・テーマ

本授業では、地域活性化を目的とした課題解決型の学習を行う。
社会調査を行い地域の抱える課題を同定、課題解決のプランを作成する。テーマはグループ内で自由に決定することができるが、必ず海外との接点を設けること。また、基本的に、前期の授業を履修した者は、後期の授業も受講する事。

・ねらい

異文化協働を通して課題解決能力を養う

・目標

- 1) 課題を設定することができる
- 2) 調査をすることができる
- 3) プランの生成ができる
- 4) プランを評価する事ができる
- 5) 上記プロセスにおいて海外との接点を設けることができる

・キーワード

異文化協働, 課題解決, プロジェクト学習, 社会調査, 地域貢献

【授業計画】

・授業の方法

プロジェクト学習を基本として、適宜講義を行う。

・日程

第1～第3回	課題を設定する
第4回～第6回	調査をする(講義・実習)
第7回～第10回	調査をする(実践)
第11回～第13回	プランの生成をする
第14回～第15回	プランを評価する

【学習の方法】

・受講のあり方

日本人学生3名, 外国人留学生3名をもって1グループとする。
ゲストスピーカーとして地域住民, 学内の外国人教員を招く
地域活性化のための具体的な課題を設定し, その中に, 海外との交流を必ず含めるものとする。

・予習のあり方

自分たちの課題に沿って自主的に議論し, 地域との交流を図る。

・復習のあり方

学生や教員からの批判的意見をフィードバックできるようグループ内で議論する。

【成績評価の方法】

・成績評価基準

プレゼンに参加し, 自分たちが作ったプランを発表することができる

・方法

教員による評価(50), 学生による評価(25), 地域(25)による評価を総合する。
評価の対象になるのは, ペーパーテスト, 提出されたプラン, 発表, 一学期間の Learning log

【テキスト】

適宜参考資料を配布

【参考書】

適宜参考資料を配布

【科目の位置付け】

【その他】

- ・学生へのメッセージ
- ・履修に当たっての留意点
- ・オフィス・アワー
- ・担当教官の専門分野



授業科目名 **メディカル・クエスト（医療職の探求）** （山形フレッシュ/B班）

担当教員：（ ） 担当教員の所属：医療系学部

開講学年：1年 開講学期：秋学期 単位数：2単位 開講形態：演習

開講対象： 科目区分：

【授業概要】

・テーマ

主体的に職業に関心を持ち、学習しようとする意識を持つ。

・ねらい

医療に関連する職業の実際を知り、社会に出ることの自覚を持ち、自ら考え学習することができる。

・目標

1. 医療関係の職種について調べることができる。
2. 調べたことを発表することができる。
3. 事前に調べたことをゲストスピーカーに質問できる。
4. 自分たちの調べたこととゲストスピーカーの講義の相違を理解できる。
5. 自己の職業に関するイメージと現場の実践とのギャップに気づく。
6. 職業に就く上での自己の課題を見つけることができる。

・キーワード

医療職、主体性、課題発見、課題解決

【授業計画】

・授業の方法

学生主体型
グループ学習

・日程

1. オリエンテーション、グループ分け
2. 調査方法の基本、文献の見つけ方、
3. 調査計画の立案
4. 調査計画相互発表会
5. 調査
6. 調査結果報告会準備
7. 調査結果報告会
8. 報告会振り返り、ゲストスピーカーへのインタビュー計画立案
9. ゲストスピーカー講義1 OG、先輩医療従事者等
10. ゲストスピーカー講義2 リハビリ担当医療従事者等
11. ゲストスピーカー講義3 医療メーカー勤務者等
12. 最終発表会準備
13. 最終発表会「この授業で得たものを実習にどう生かすか」、ゲストスピーカーからのコメント
14. まとめと振り返り1 自分たちのイメージと現場とのギャップは何だったのかを総括
15. まとめと振り返り2 自分が実習に向けてどのような学びを進めるべきかに気づく

【学習の方法】

- ・ **受講のあり方**
興味を持って主体的に取り組んでください。
授業内で終わらない調査等は時間外で行う必要があります。
- ・ **予習のあり方**
シラバスを熟読し、全体の計画を頭に入れて授業に取り組むよう心がける。
- ・ **復習のあり方**
毎回の活動報告が授業の復習となるので報告を念頭に置いての活動を心がける。

【成績評価の方法】

- ・ **成績評価基準**
点数化した評価表を作り基準を明確にする。
- ・ **方法**
 1. 毎回、グループワークの報告書を提出させ教員が評価
 2. 学生同士による日々のグループワーク相互評価
 3. ゲストスピーカーによる学生発表の評価

【テキスト】

【参考書】

【科目の位置付け】

【その他】

- ・ **学生へのメッセージ**
なりたい自分を見つけられる授業です。
自ら調べ、自ら考え、自ら目標を設定でき授業になってます。
- ・ **履修に当たっての留意点**
- ・ オフィス・アワー
- ・ 担当教官の専門分野

授業科目名 **沖縄文化再発見 海がつなげる 島をつなぐゆいまーる沖縄**
(あわもり/C班)

担当教員： () 担当教員の所属：

開講学年： 年 開講学期： 期 単位数： 単位 開講形態： 開講対象： 科目区分：

【授業概要】

- ・ **ねらい**
沖縄文化を知り、自大学の使命を再認識することで自大学の存在価値を理解する。
- ・ **目標**
沖縄の歌（ことば）の背景にある、歴史、風土に基づく思想を説明できる。
沖縄文化に関するフィールドワークを通して課題発見能力を身につける。

【授業計画】

- ・ **授業の方法**
 - 1 沖縄文化に関する基本概説（2回）
 - 2 フィールドワークとプレゼンテーション（中間・最終）
 - 3 分析方法
 - 4 地元の外部講師によるレクチャー
 - 5 レポート作成
- ・ **日程**
 - 1 概説
 - 2 外部講師レクチャー
 - 3 分析
 - 4 地域の選択

- 5 フィールドワーク
- 6 フィールドワーク
- 7 フィールドワーク
- 8 プレゼンテーション
- 9 フィールドワーク
- 10 フィールドワーク
- 11 フィールドワーク
- 12 最終発表
- 13 レポートのまとめ
- 14 レポートのまとめ
- 15 ディスカッション

【学習の方法】

・受講のあり方

地域に溶け込めるように自らすすんでコミュニケーションをとってください。

・予習のあり方

・復習のあり方

【成績評価の方法】

・成績評価基準

・方法

基本概説講義のテスト
 プレゼンテーション技術評価
 プレゼンテーション内容評価
 レポート評価



【テキスト】

【参考書】

【科目の位置付け】

【その他】

- ・学生へのメッセージ
- ・履修に当たっての留意点
- ・オフィス・アワー
- ・担当教官の専門分野

授業科目名 世界と私(グローバル文化入門) (セブテンバー/D班)

担当教員：蔵王太郎 他 担当教員の所属：

開講学年：2年 開講学期：前期 単位数：2単位 開講形態：講義、演習

開講対象：全学部 科目区分：選択

【授業概要】

・テーマ

自分の世界を広げて、主体的に外の世界と繋げる。

・ねらい

グローバル化が急速に進行する現代世界に生きる一人として、自他の文化を実際に比較し理解する。それにより、将来、実社会において異なる文化を持つ、人、組織と共働、貢献できる人材を育成する。

・目標

自国（自己）と他国（他者）を比較し、理解できる。

・キーワード

自国－自己、他国－他者

【授業計画】

・授業の方法

講義、グループワークおよび発表

・日程

1. オリエンテーションおよび出身地域を考慮したグループ分け
2. 日本の中の異なる文化①
3. 日本の中の異なる文化②
4. 日本の中の異なる文化③
5. グループワークおよび発表（事後レポート提出）
6. 外国の文化①
7. 外国の文化②
8. 外国の文化③
9. 外国の文化④
10. グループワークおよび発表（事後レポート）
11. 実務家による海外の実態①
12. 実務家による海外の実態②
13. 日本と他国の比較 グループワーク
14. 日本と他国の比較 発表（発表を評価）
15. まとめ（事後個人レポート）

【学習の方法】

・受講のあり方

予習をしっかりとる。
積極的、主体的に発言する。

・予習のあり方

次回までに自分の考えをいえるようにしておく。

・復習のあり

【成績評価の方法】

・成績評価基準

学生各人の考え、意見を加味したグループレポート（10%、3回）

積極的発言（10%）

最終個人レポート（60%）

・方法

【テキスト】

【参考書】

【科目の位置付け】

【その他】

・学生へのメッセージ

・履修に当たっての留意点

「地域掘り起し」を履修しておくことが望ましい

・オフィス・アワー

・担当教官の専門分野



授業科目名 ナノテックと21世紀のエネルギー問題 (さくら/E班)

担当教員: () 担当教員の所属:

開講学年: 一年 開講学期: 後期 単位数: 2. 単位 開講形態: 講義

開講対象: 大学院 科目区分: 化学

【授業概要】

・テーマ

ポスト原子力を考えるうえで、ナノテック応用は次世代水素社会のエネルギー問題に重要な貢献をなしうる。

・ねらい

- ・ナノ材料基礎科学の知識を獲得する
- ・プレゼンテーション能力を向上させる
- ・ナノ材料の基礎合成法・検出と水素製造への応用について学習させる

・キーワード

ナノテクノロジー
21世紀エネルギー問題
材料科学

【授業計画】

・授業の方法と日程

講義とプレゼンテーション

・日程

- ▶ イントロダクション 講義と個人調査の進め方の説明
- ▶ 2回 エネルギー諸問題 概説 ナノテックの基礎
- ▶ 3～8回 毎週、エネルギーとナノテックに関する講義
(キーワードを各授業で与える。その中から学生は3つテーマ案を考える。その中から教員が指定したテーマを、各学生が調査・学習し自分のプレゼンを組み立てる)
- ▶ 8回目 講義内容についての試験
- ▶ 9～14回 学生によるプレゼン
- ▶ 15回 まとめ

【学習の方法】

・受講のあり方

プレゼンテーションの準備のために問題意識を強く持ち、議論に積極的に参加する

【成績評価の方法】

・成績評価基準

学習内容を正確に理解し、さらにそれを実際に使えるようになることを合格の基準とする

・方法

- ▶ 授業参加 10%
- ▶ 中間試験 40%
- ▶ 個人プレゼン 30%
- ▶ 質疑応答 20%

授業科目名 社会の中での、社会の中への、研究活動 (さわやか/F班)

担当教員: () 担当教員の所属: 小田 隆治

開講学年: 3年 開講学期: 後期 単位数: 単位 開講形態:

開講対象: 科目区分:

【授業概要】

・テーマ

1-3年生で学んだことを通して、これまでの専門で培った知識をもとに社会に飛び出して調整力を身に付ける
職業意識と労働意欲を培う授
研究室を飛び出して社会の門をたたいてみよう。Science for society, society for science
needsを拾ってきて研究室にも

- ・ねらい
自らのシーズを理解し、社会のニーズを調査し、最先端研究の知見を還元することを通して、調整力を養う
- ・目標
 - 学習目標
 - ・研究活動の成果を形として社会に受け入れてもらえることにチャレンジする
 - 到達目標
 - ・社会のニーズを調査し課題を発見することができる
 - ・自らの知識・技能を活かし、最先端研究の内容を翻訳することができる
 - ・社会の中での自分の立ち位置、役割を説明することができる
- ・キーワード
ニーズとシーズ、人間性、理想と現実、社会と自分

【授業計画】

・授業の方法

講義、学外実習、プレゼンテーションを主体に行います。

・日程

- 1－3 自らの研究を理解する
- 4－5 実習に行く Needs 調査 2－4
- 6 振り返り 批判するグループと肯定するグループ
- 7 自らの seeds と needs のすり合わせ
- 8 計画書のプレゼン
- 9 教員、先輩の変更点を元にした計画書の練り直し
- 10－12 課題学習
- 13－14 社会に問う
- 15 結果をプレゼンして学内での評価と企業評価（学内はグループごとに相互評価）

【学習の方法】

・受講のあり方

- マナーと責任ある行動を（身だしなみ、挨拶他）

・予習、復習のあり方

これまで学んだことを総復習すること（1，2年生に確認する）

【成績評価の方法】

・成績評価基準

・方法

グループ同士、グループ内での評価、企業の評価を行う。
10年後の自分の将来像をプレゼンし、職業意識と労働意欲について評価する（教員）

【テキスト】

なし

【参考書】

【科目の位置付け】

入門編（1年生）、発展編（2年生）の実践編です

【その他】

・学生へのメッセージ

社会の中への、社会の中での貢献を意識して取り組みましょう

・履修に当たっての留意点

この授業では社会人として扱います

・オフィス・アワー

前もって連絡の上くること（社会のマナーを学ぶ）

・担当教官の専門分野

FD

◇グループ作業記録 プログラムⅣ 全体討議記録◇

B班（講義名：メディカル・クエスト）

- ・主体性を重んじる授業
- ・職業に関心をもち、自ら考える授業
- ・キーワード：医療職、主体性、課題発見、課題解決
- ・挫折を経験するという意味で、現場と自分のギャップを掘り起こす。

A班（講義名：地域異文化交流）

- ・目標は地域活性化に向けた「課題設定」「調査」「プランの作成・評価」ができること。
- ・プロジェクト学習をベースとする。
- ・日本人学生3名、外国人留学生3名を1グループとする。
- ・評価は、教員による評価50%、学生による評価25%、地域による評価25%で構成する。

F班（講義名：社会の中での、社会の中への研究活動）

- ・縦割り授業（1年から3年次の学生が受講する）。
- ・研究室を飛び出して社会に出る講義。
- ・専門性をベースに社会の中での調整力を身につける。
- ・最終的なプレゼンを学内、学外（企業）で評価する。
- ・講義の中で、アポイントを取るなど社会人のマナーも併せて学ぶ。

E班（講義名：ナノテックと21世紀のエネルギー問題）

- ・脱原子力をテーマとし、ナノテックを利用とした次世代水素社会について学ぶ。
- ・知識の獲得と同時にプレゼンテーション能力の向上を目標とする。
- ・成績評価は学習内容の理解と、実際への応用力で評価する。

D班（講義名：世界と私）

- ・自分の世界を広げて、主体的に外の世界とつなぐことをねらいとする。
- ・自国（自己）と他国（他己）を比較し、理解することを目標とする。
- ・講義の中では、実務家（ゲストスピーカー）の話も入れる。
- ・事前に「地域掘り起し」（C班）の講義を受けておくことが望ましい

C班（講義名：沖縄文化再発見）

- ・ 沖縄文化を知り、大学の使命や存在価値を理解する。
- ・ フィールドワークを通して島ごとの文化的多様性について理解する。
- ・ 地元の方からのレクチャーの後、調査地域を決める。
- ・ 評価は、知識の獲得状況、プレゼンテーションでの受講状況、レポートによって行う。

質疑応答

B班に対して

- ・ 挫折から立ち直るためのプログラムはあるのか？
→担当教員、ゲストスピーカーなどが対処法について学生に指導する。

A班に対して

- ・ アジアに特定しているが、その理由は学生にどう伝えているのか？
→日本では、国際化というとヨーロッパに目が向きがちだが、近隣のアジアに目を向けることで、独自性をだす。
- ・ 3人という設定の根拠は？
→グループの適正人数が6名なので、日本人と留学生を半数に設定した。



【第2チーム】FD合宿セミナープログラム及び記録

○プログラム抜粋

FD合宿セミナーに当たって

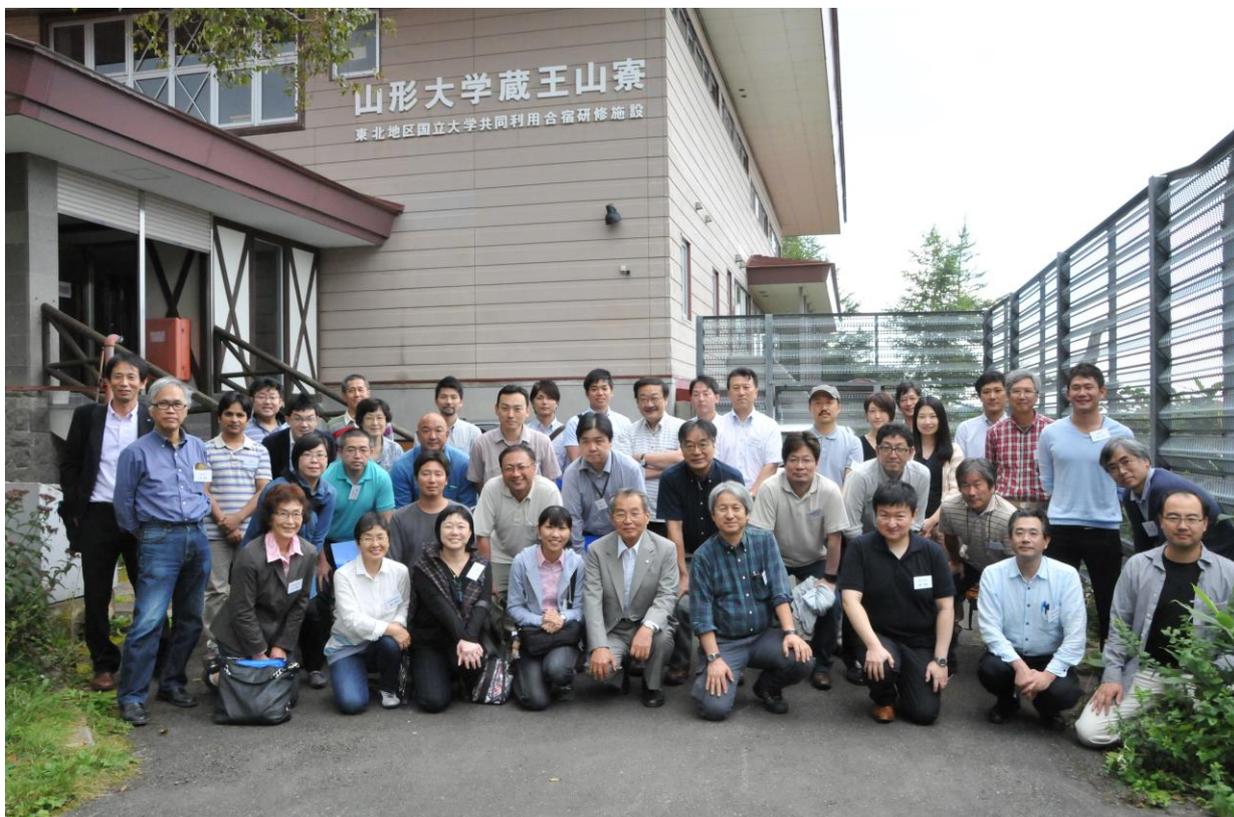
山形大学では、平成13年度よりこの合宿セミナーを実施し、教養教育の目標や授業の企画、シラバス作成を通して授業のスキル向上を実現するとともに、学部間の人的交流の拡大・充実を図ってまいりました。このような基盤のうえに、さらに「授業改善」に焦点化したアドバンスプログラムを実施することになりました。

このセミナーの第一の目的は、「個人個人の教員が教育者としての自己認識の深まりと学生の学びを大切にする授業、および授業改善の方法を具体的なケースを交えて考察・議論し、学生を中心とする教育・授業を発展させること」です。この目的を達成するために、本セミナーでは4つの参加型ワークショップを行います。これにより、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することにもなります。

また、「ワークショップを共通の題材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が大学の教育分野全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「構成員こそが大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーはFDネットワーク“つばさ”の参加校を始めとして、全国の大学等にかかれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大・高専の発展に寄与されることを願っております。



第2チーム参加者と山形大学 小小学長（前列左から5人目）

第14回 山形大学FD合宿セミナー日程表

期 間 第2チーム：9月9日（火）～10日（水）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当
12:45	山形大学小白川キャンパス集合・受付	
13:00	送迎バス大学出発	
14:00	会場到着・記念撮影 セミナー開会 開会のあいさつ	橋爪、時任
14:30	オリエンテーション	橋爪、時任
14:40～15:10	アイスブレーキング	田実
15:10～16:50	プログラムⅠ「学生のニーズに応える授業とは？－大学教員の美しき誤解とインタラクティブな授業の工夫」	田実
16:50～17:00	休憩（10分間）	
17:00～18:10	プログラムⅡ「学生の学修を支援する授業とは？－発達障害等の配慮を必要とする学生が受講している授業の工夫」	田実
18:10～19:00	夕食（その後お風呂・休憩）	
19:00～20:00	入浴・休憩	
20:00～22:00	懇親会	
22:00	中締め	

○第2日目

時 刻	項 目	担 当
7:30～	朝食・部屋の清掃・部屋退出	
8:30～10:00	プログラムⅢ「授業力の向上－わかりやすい授業を実現するために－」	大島
10:00～10:10	休憩（10分間）	
10:10～11:40	プログラムⅣ「研修のふりかえりとまとめ」	大島
11:40～	修了式（ポストアンケート）	橋爪、時任
12:20～	昼食	
13:10	送迎バス蔵王山寮出発	

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。
- 退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。
- スキーヤーズベッドは各部屋2段になっておりますが、清掃と危険防止の観点から2階部分は使用しないでください。
- ベッド上での飲食はご遠慮ください。

オリエンテーション

1 FDの必要性

- ① 大学の組織的教育力の向上
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学教員個々の教育力の向上
- ④ 大学生の質的变化への対応
- ⑤ 大学の社会的な教育責務の明確化

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えることの意味付け。
- ② 学生一人ひとりの発達と同様に教員一人ひとりが同僚の力を得て発達することを改めて確認する。
- ③ 教授法について共に考え、スキルアップする。
- ④ 教員相互の交流。

3 セミナー形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：6班
「プログラムⅠ・Ⅱ」（1日目）と「プログラムⅢ・Ⅳ」（2日目）で、班構成を替えます。
- ③ プログラムによっては、全体での発表の際に記録をとるための記録係を置く場合があります。また、グループワークにおいて、各班に、司会者、記録係等を置く場合もあります。
- ④ 「③」で記録したものは、各プログラム終了後に提出していただきます（この記録は、こちらでコピーした後、速やかに全班に配付します）。
- ⑥ 最終日に合宿セミナーに関するポストアンケートを実施します。

プログラムⅠ「学生のニーズに応える授業とは？—大学教員の美しき誤解とインタラクティブな授業の工夫」

ここでの課題

プログラムⅠ「学生のニーズに応える授業とは？—大学教員の美しき誤解とインタラクティブな授業の工夫」では、学生による授業評価アンケートに関するデータや知見から、学生主体型授業に求められているニーズと具体的な授業方法について解説します。その後、インタラクティブな授業をプレゼン体験して頂きます。

○ プログラムの講師による講義	60分	
○ 実践交流	15分	
○ グループでの協議・プレゼン説明	5分	
○ グループでのプレゼンとまとめ	20分	全体で100分

プログラムⅡ「学生の学修を支援する授業とは？－発達障害等の配慮を必要とする学生が受講している授業の工夫」

ここでの課題

- 発達障害のある学生についての講義Ⅰ 20分
- 発達障害の疑似体験 20分
- 発達障害のある学生についての講義Ⅱ 15分

プログラムⅡでは、最近増加傾向にあると言われている発達障害のある学生に対して、文科省等の考え方を踏まえつつ、発達障害をどのように理解し授業や学生生活においてどのように支援していくことができるか、について事例を交えながらお話したいと思います。また、発達障害のある人の情報受容のやり方等を体験する場面も設定する予定です。

- まとめと質疑応答 5分 全体で60分

プログラムⅢ「授業力の向上－わかりやすい授業を実現するために－」

ここでの課題

プログラムⅠ～Ⅱで検討した学生のモチベーション向上、授業への参画を実現するためには、まず教える教員自身に指導力・授業力が求められます。「わかりやすい」「興味の湧く」授業を実現するにはどうしたらいいのか。このセッションでは、授業スキルの向上という基本に立ち返り、講師の体験に基づく講義をベースにディスカッション形式で考えを深めます。

- プログラムの講師による内容の説明 5分
- 「授業力向上のためには－ケーススタディ－」 55分
→次頁のレジュメにそった講義
- 「よりよい授業を目指して－ディスカッション－」 30分
→講義内容を踏まえ、よりよい授業を実現するためのポイントを整理する。
→自分の持っている問題点の洗い出しと解決策の模索を行う。

全体で90分

【ケーススタディ ～私の授業法～】

1. ガイダンスのしかた

- 必ずワンペーパー作って渡す。 ← 最初の3週間で徹底

2. 授業の組み立て方

- 90分を3つのパートにわけると ← 話しの構造化
- 時間の使い方を予告し、守る。 ← 全体像を見せることが大切
- 「つかみ」が大切（冒頭に力点） ← 終わりはすっきり

3. 効果的な表現技術

- 言語表現の工夫
 - ・「例示」の多用 ← 相手に合った例を挙げる
 - ・「つなぎ言葉」の活用 ← ゆっくり間を取って話す

・「用語」の選択と位置付け ← 新出語に注意

■ 非言語表現の効果

- ・ 身体表現 ← gesture と posture の使い分け
- ・ 対人距離 ← 机間巡視／指導はどこまで有効か
- ・ アイコンタクト ← プレッシャーと激励

4. 授業ツールの活用

【提示資料】・・・ 学生の注意を惹きつける

■ 「聴かせる」と同時に「見せる」 ← 視覚効果は絶大

Cf. 日常生活における知覚機能別情報量

視覚83% 聴覚11% 嗅覚3.5% 味覚1.5% 触覚1%

(小林敬誌他著『プレゼンテーション技法・演習』より)

← やりすぎは逆効果

Cf. 木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり (蓮如)

■ 板書は最高のビジュアル ← 小学校時代からのお約束

【配付資料】・・・ 学生の手元に残す

■ レジュメの効果 ← 情報を与えすぎない

■ 教科書の使い方 ← 買わせたら使う

5. 双方向性の確保

■ 発問のしかた ← 大切なのはリズム

■ 紙ベースでのやりとり ← e x) 巨大出席カード
大手前短大「なるほどポイント」

6. 評価のしかた

■ 「合わせ技」が基本 ← 内訳をシラバスに明記
e x) 参加 10% 小テスト 40% 発表 20% 提出物 30%

■ 個人情報保護と説明責任 ← 授業期間と終了後で区別

7. まとめ

■ アリストテレスの話し方 3 要件 ← ロゴス・パトス・エートス

プログラムⅣ「研修のふりかえりとまとめ」

ここでの課題

プログラムⅢで議論、検討したより良い授業を実現するためのポイントについて、各グループに発表していただき、全体での分かち合いを行います。また、2日間の研修を通じて、自分のコミュニケーションスタイルが他人にどんな印象を与えたのか、イメージ交換ゲームを通じてふりかえります。

- プログラムⅣの検討結果のプレゼン 5分×6班 30分
- イメージ交換ゲームの実施 30分
- イメージ交換ゲームのふりかえり 15分
- 研修全体のまとめ ー学びをFDに生かしていきましょうー 20分 全体で90分

プログラムⅠ記録「学生のニーズに応える授業とは？－大学教員の美しき誤解とインタラクティブな授業の工夫」
プログラムⅡ記録「学生の学修を支援する授業とは？－発達障害等の配慮を必要とする学生が受講している授業の工夫」



プログラムⅢ記録 「授業力の向上—わかりやすい授業を実現するために—」
プログラムⅣ記録 「研修のふりかえりとまとめ」

